

ダメ提督製造機(雷)が
病み気味

四季 桜月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りです。

前に見た絵に感化されて書いてみた小説です。

ほとんど自己満です。

短いです。

形式は前に投稿した「響が病み気味」と同じです。

※ラストの要望を活動報告にて募集中、なのです！

目次

1 話：ある鎮守府の日常	—	1
2 話：ダメ提督が改心して一日目	9	
3 話：病みへと進んでいく雷	—	18
4 話：病んだ雷	—	26
終話（パターン1）：共依存の末に・・・	37	
終話（2）：意志疎通	—	44

1 話：ある鎮守府の日常

「あ、司令官、おはよう！もう、お寝坊さんなんだから」

「ん、あ、雷か。もう朝か？」

僕が目を開けるとすぐ目の前に茶色瞳をした茶髪のかわいらしい少女の顔があった。

その少女の名は言わずもながら我鎮守府の秘書官、雷である。

その彼女はいつも秘書官だからと言っては私に世話を焼いてくれている。

まるでおかんだ。ああ、これがおかんというやつなのだな。

「ほんと司令官は朝に弱いんだから。ほらほら、布団から出た出た」

「うー、寒いからあと5分」

「何言ってるのよ、もう。早く着替えて執務室に来なさいよ」

そう言い残すと雷は布団を引きはがし、しまつてしまった。

うう、ほんとうにおかんみたいだ。

つと、今日も雷が洗つたらしい服で執務だな。

なんだかわからないが私の服だけ別洗いらしいから雷がやってくれている。

さて、着替え終わったわけだ、執務室に向かうか。

「あ、司令官、そこ違ってるわよ。ほら、ここはこう。もう、司令官はやつぱり私がいないとだめなんだから」

「ああ、本当に助かるよ。雷がいないとだめだなあ」

「ふふ、もおーと私に頼つてもいいのよ？それとデイリーはやつておいたわよ。鎮守府の回転なら私に任せておいて」

「おお、ほんとうか。いつも助かるよ。ありがとな、雷」

ほんと助かるな。

雷のおかげで仕事は半減以上するし、大変だったところから比べるといいなあ。

ぐうぐう

「あれ、司令官、おなかすいたの？」

「あ、ああ、今日はいろいろとやらないといけないことが多くてな。夕食が取れなかった

「からな」

「確かに夕食食べてなかったわね。・・・司令官は先にながって夕食を食べて来ていいわよ」

「ん、ああ、すまないな。お言葉に甘えさせてもらおうよ」

ふう、腹が減って死にそうだ。

速いところ食べて明日に備えて寝ておかないと。

「・・・さて、司令官は行ったわね。早いところ続きを終わらせないと」

）

そんなこんなで毎日を過ごしている私だが、夕食を食べ終わったところで雷の姉妹、第六駆逐隊の3人に呼ばれた。

「司令官、いい加減にしてほしいのです」

「そうよ、司令官はちよつと度が過ぎてるのよ」

「??？」

ん、この娘たちは何を言ってるんだ？

何か私は悪いことをしたかな？

思い当たることはないが……。

「電、暁、言葉が足りてない。正確には、司令官、あなたは雷に甘え過ぎだ。もうちよつと押さえろ。じゃないといつか雷は倒れるぞ」

「……何を言ってるんだ、響？」

雷に頼り過ぎている？そんなわけないじゃないか。

雷がやってくれるから頼ってるんだ。

無理強いさせているわけではないのだぞ？

「……司令官は本当に自覚がないのだな。まあ、ならまだこの四連装酸素魚雷を使わずに済んでよかったよ」

「は、はあ？何物騒なことを言ってるんだ」

人間が魚雷とか受けたら死ぬからな。

そんなだけなことやった覚えはないぞ。

「もう、司令官、頼るなられでいいな私に頼りなさいよ。雷ばかりずるいじゃない」

「そうなのですよ、司令官さん」

「……とりあえず二人は黙ってようか」

「はい（なのです）」

・・・結局なんなんだ？

「司令官、私たちからいいたいことはただ一つだよ。もう少しちゃんとしてくれ」

「・・・私はちゃんとしていないのか？」

ちゃんと執務もこなしているし、艦娘たちからの評判の悪くないと思うんだが。

「・・・えっと、理由を話そうか。司令官はちよつと雷に頼り過ぎた。いくら雷から言ってきた事だからと言っても、流石に度が過ぎている。司令官は考えたことがあるか？雷の負担というものを。まあ、考えたことがないだろうからこうなったのだがな」

「・・・雷の負担？・・・」

雷の負担。

・・・？

「・・・わかってないようだね。ほんと雷の提督は共依存しているよ。暁、電、例を挙げ
てやってくれ」

「任せなさい。・・・司令官は起きて真っ先にみるのは？」

「・・・起こしに来た雷だが？」

それがどうかしたのか？

「・・・司令官はいつつも5時半には起きているわよね。じゃあ、その司令官を腰に来て

いる雷はいつ起きてるかわかってるのかしら？」

「……いや」

「4時半よ！そんな朝早くに起きてシャワーを浴びて、準備して、あなたの服を準備して、デイリーの半分をして、大変だと思わないの!？」

・・・4時半。

そうか、私が5時半に起きるといふ事は雷はもつと早くに起きて準備しないといけないという事か。

考えたこともなかった。

「それに司令官さん、司令官さんは雷ちゃんに仕事がある事もお構いなしに自分の書類も雷ちゃんの世話を焼かれていますか。雷ちゃんは自分の仕事もあるのに司令官の分も見てるんですよ。どれだけやっていると思ってるんですか！」

「……」

普通に考えて自分の分と半分もないが私の分をやっていることになるな……。

……。

「それにだ、司令官、今日も司令官は余った仕事を残してきたようだな。その仕事はどうなっているかわかるのかい？明日にはなくなっているだろう？あれは雷がやっているからだぞ」

「そんなばかな、あれは徹夜でもしないと終わらないぞ。・・・つ、まさか」

「ああ、そのまさかだ。やっとわかってくれたか。これだけ言えば最初に言ったことの意味は分かっただろ？」

・・・

「司令官、あなたは雷に甘え過ぎだ。もうちよつと押さえろ。じゃないといつか雷は倒れるぞ」か。

・・・流石に私は甘え過ぎていたのかもしれないな。

雷に頼り過ぎていた。雷の性格のせいで気づくことができなかつた。

このまま頼り過ぎていると雷は倒れる、か。

確かにそうだな。雷は秘書官だから出撃も演習もしているのだしな。

普通に考えたらもうぶつ倒れていてもおかしくないな。

「ああ、わかつたよ、そうだな。私はもつとちゃんとしないとな」

「スパシーバ。それを聞きたかつたんだ」

「そうですよ、司令官！私が秘書官だったときはものすごく頼りになる司令官だったのです！」

「司令官はやればできる人なのよ。レディーの私が言うんだから間違いないわ」

「ああ、ありがとな、お前たち」

雷は良い姉妹たちを持つているな。

秘書官に倒れられたら司令官として大変だからな。

「さて、それじゃあお前たち、また明日な」

今日はもう寝ようかな。

雷ももう終わったようだし。

明日からは雷に一切頼らないように完璧に執務をこなさないとな。

2話：ダメ提督が改心して一日目

一日目

「ん、ふああああ。．．．もう朝ね」

私はわざと声を出して眠りきっていた脳みそを再起動し、上半身を起こした。

そして鳴り響いていた目覚まし時計を止め、布団から這い出した。

「っ、さむ」

思わず身を震わせながらも布団をたたむと、シャワーを浴びるために着替えとタオルと持ち出した。

最近ではどうしてもすぐに目が覚めなくて体がシャキツとしなくなってしまうている。

だからシャワーを浴びるようにしている。

それに提督にはいつもきれいな雷を見てほしいしね。

「ふう、まだ三人は寝ているわね。起こさないようにしないとね」

そう気持ちよさそうに寝ている姉妹たちを見下ろすと、扉の方に急いだ。

「っあ。．．．ふう、もう少して転ぶところだったわ」

最近急に視界が揺らぐのよね。

寝起きだからかしら？

まあ、そんな自分の健康を気にしている暇はないわね。

．．．

「．．．雷は行ったかな」

「もう、電たちが気付かないわけじゃないのです」

「今日で雷のあんな姿を見なくて済むのね。よかったわ」

「それにしても司令官を更生するのに丸一晩かかったのは予想外だった」

「共依存を直すのって時間がかかる物ね」

「でもちゃんとしようと司令官さんが思ったのって司令官さんが雷のことをちゃんと
思ってるからだよね。．．．ちよつと羨ましいのです」

「にしても昨日の夜は地獄だったよ。司令官が早くわかってくれないせいで妹の闇を見た気がするよ」

「何のことなのです？」

「暁なんてあの後トイレを一人で行けなかつたくらいだ」

「ちよ、なんでばらすのよ」

「司令官さんが早くわかってくれないのがいけないのです」

）

ふう、気持ちよかつたわ。

すつかり目が覚めたわ。

さて、早く司令官さんを起こさないと。

「しーれーいかーん！おーきーなーさつ・・あ、あれ？」

「お、雷か。今日も早いな。さて、今日も一日頑張つていくぞ」

あ、あれ、何で？

なんで司令官は起きてるの？

いつつも私が起こしに来ないと起きないのに……。

なのになんで今日は司令官は起きてるの？

「ん、雷、何ポーつとしてんだ。ほら、行くぞ」

「……え、あ、うん」

司令官は私の頭をポン、つとたたくと部屋から出て行ってしまった。

おかしい、これはおかしい。

百歩譲って司令官が起きていることはまだいい。

でも起きているだけじゃなくて身だしなみもちゃんとしてるなんて……。

こんなの普通じゃないわよ。

「ん、どうした雷。ほら、行くぞ」

「え、あ、わ、わかってるわよー」

私は司令官に呼ばれて思考を中断させると司令官の元に走っていった。

……ま、まあ、たまには司令官も早起したくなるのかもしれないわね。

にしても、司令官の部屋に目覚まし時計が3個ほど増えてるのよね。

なんですかしら。

「あ、あれ、司令官？何をしているの？」

司令官はいつもと違う事をしていた。

「ん、ああ、デイリーだよ。もうすぐ終わるから心配はいらないよ」

「え、いつもそれは雷が・・・」

あ、あれ、何で？

もうすぐ終わるってことは、雷が執務室に来る前から初めていたってことなの？

そんなわけが・・・だってあの司令官よ!?

デイリーの任務なんてまともにやろうとしないのになんで今日に限って・・・。

・・・い、いや、たまたま早起きしたついでにやったに違いないわ。

そうよ、そうに決まってるわ！

「司令官、それじゃあ司令官はいつも通り机に置いてある分だけやればいいわ。あとは私に任せなさい！」

「あ、いや、雷はこつちをやっておいてくれ。そつちと机の上に置いてあるのは私がやるから」

そう言うと司令官は私のやろうとしていた書類の山を自分の机の上に置いた。代わりに残されたのは司令官の三分の一もあるか怪しいくらいの紙束だった。

「え、し、司令官？これは・・・」

「ん、どうした？何か問題でもあったか？」

司令官はもう書類の山に手を出して作業をしながらこちらも見ずに言っていた。

・・・ど、どういう事なの、これは？

わ、私は夢でも見てるの？

「・・・も、問題も何も、司令官、そんな量、やり切れるの？」

「ん、何だ、そんなことか。やってできないことはない。まあ、見てろ」

本気の様ね。

いつもの倍くらいの量なのに・・・。

どうして、何で・・・。

「し、司令官、私がいるじゃない！」

「ん、ああ、そうだな。それだけやったら休憩でいいぞ」

「!？」

そんな、わたしが、いる、じゃない……。

なんで私にやらせてくれないの？頼ってくれないの？

……た、多分今日がたまたま、司令官はそう言う気分なだけなのよ
そう、そうに決まってるわ。

じゃ、じゃないと、こんなの……。

）

「司令官、夕食の時間よ。私が司令官のために作って来てあげるから仕事は続けてて
いよいよ」

結局司令官は私に一度も頼ることなく、書類を片付けているけど、多分今日だけよね
！そうよね！

今日だけたまたま、そう、たまたまなのよ。

それにまだ司令官のためにできることはあるわ。

ふふ、何を作ってあげようかしら。

やっぱり肉じゃが？

「ん、もうそんな時間か。雷、皆のところで食べに行こうか。昨日はできなかつたからな」

「え、なんでなの、司令官。．．．あ、いや、何でもないわ。そ、そうね、艦隊のみんなと親睦を深めるのも大事なものね」

．．．そ、そうよね、他の艦娘とも仲を深めないと、だものね。

なんで私じゃなくてほ力の娘ナノ．．．。

か、考えるのはやめましょ。

き、気のせいよ、そんなの。

今日だけたまたまよ。

そ、そんな日もあるわよね。

「そう言えば今日の当番は比叡だったわね」

「え」

）

「司令官、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。また明日も頼むな」

結局今日は何もできなかつたわ。

で、でも逆に懲りたらこれで司令官は私のありがたみを再認識してくれたはずだわ。

そのはずよ。

なら、明日からはもつと私のことを大事に思ってくれるだろうし、これで明日からまた司令官の世話を焼けるわね。

・・・今日はもう寝ようかしら。

ふう、こんなことじゃあ体がなまっちゃうわ。

3話：病みへと進んでいく雷

二日目

「つ、うるさい！片耳に二つずつ、合計四つの目覚まし時計とかうるさくて敵わないな。まあ、起きればするが」

私は自分の自前の目覚まし時計と暁、響、ぷる・電に渡された目覚まし時計の合計四つを使う事で朝早く起きることに成功した。

いや、てか起きないと鼓膜が破れるから。

さて、雷が来る前に雷の負担が減らせるようにしないとな。

ん、これが世に聞くおかん孝行というやつか！

ふふ、雷には頼るために倒れられては困るからな。

・・・ていうかしないと電に、ガクブル。

「つと、早いところしつかりやらないとな。確かに昨日は少しだけど資源も以前より多かつたし、いいんじゃないか、これは」

それと今日は響たちに言われたことを雷に伝えないとな。

〽

昨日と同じように、だが昨日よりはだいぶ楽にやるべきことが済んだ。

そして執務室の座敷の上に座った瞬間、扉は開け放たれた。

「しーれーいかーん！おーきーん．．．お、おはよう、司令官」

「ああ、おはよう、雷」

ん、最初の部分はいっつも私を起こすために部屋を入るときの声だな。

ほうほう、こんなに満面の笑みで元気な声で入ってきていたのか。

うん、可愛い、甘えたい．．．けど、甘えたらまた雷に負担をかけちゃうからな。ていうかなんで私が起きてたらあんなに戸惑ってるんだ？

なんかどことなく残念そうだが。

「し、司令官、今日も司令官のために、雷、働くわ．．．よ？」

「ん、そうか。今日もよろしくな」

・・・なんで疑問形？

まあ、そんなことはないか。

さて、早く執務室に行つて今日分を終わらせないとな。

じゃないと終わらない・・・。

）

「し、司令官？今日はこれだけなの？」

雷は十枚ちよつとの紙束を持って、小刻みに震えていた。

ふう、前より少しだけだが減らして、楽にさせるように配慮したつもりだ。

「終わったら艦隊のみんなの様子を見て来てくれ。それと間宮には話を通してあるから私のおごりでいくだけでも食べて来ていいぞ」

「・・・え？」

お、驚いてる。

まあ、そうだな、間宮で食べ放題とか私でも楽しみなくらいだ。

でもこれぐらいはした方がいいよな。

「し、うれしいk「さて、今日も張り切ってやるぞ。雷も頼んだぞ」

さて、今日の一発目は・・・新型艦載機「流星改」の開発の検討志願書か。

これは正規空母か軽空母の娘たちか。

「・・・」

）

・・・仕事が終わったわ。

こ、これから鎮守府内を見回るわ。

それと間宮を使い放題。

これって、どういうことなの。

司令官は何を考えているの・・・。

「あら、雷じゃない。こんな時間に珍しい」

昨日今日といくら何でも私に仕事を回さなすぎよね。

なんでなのかしら。

・・・まさか、司令官はもう雷のことを

「ちよつと、雷!？」

「つあ、び、びつくりしたあー。な、なんだ、叢雲じゃない、どうしたのよ？」
いきなり大きな声を出すなんて、びつくりするじゃない。

「・・・」

「ん、何そんなに前のめりに？私の顔に何かついてるの？」

叢雲はなんだか知らないけど、怖い顔をして私の顔を覗き込んできた。

「そう言えば叢雲は今は何してるの？」

「ああ、私はこれから遠征でね。それじゃあもうそろそろ行くわ」

叢雲はそう言うのと立ち去って行った。

・・・遠征。

私は秘書艦だから自動的に第一艦隊の旗艦だから行ってないわね。

でも今日の出撃がないようね。

昨日もだけど。

・・・資材はあるのになんでかしら。

私は今執務室の前にいる。

放送で司令官に呼ばれたからだ。

何か重要な要件らしい。

やっぱり私がいないとダメという事なのかしら。

そりやそうよね、これで私をもーっと頼ってくれるわね！

というわけで私は元気よく扉を開けた。

「司令官、やっぱり私がいないとダメかしら？」

私は多分満面の笑みで部屋に入っただろう。

その時言われることを知らないで。

「あ、雷か。いいたいことは一つだけだ。明日から一週間の休暇だ」

私は響たちにもらったセリフを書いた紙を淡々と読み、告げた。

私からしたら一週間も雷と会えないのは本当にきついのだが、これぐらいした方が雷

の疲れとかが完全にとれるだろう。それが雷を想えば一番のことだ。

・・・つて、響たちが言っていた。

だから、自分の気持ちを押し殺して淡々と告げた。

「・・・し、れい・・・かん？」

司令官、何を言ってるの？

司令官？私が休んでいいの？

私が休んでいいの？私が・・・

なんで、なんでなの？

司令官は私がいなくてもいいの？

私なんて必要ないの？

司令官、なんで、なんで、なんデ？

「それじゃあ、それでよろしくな。しっかり休んでくれよ」

私はそう言つて雷の頭に手を一瞬置き、そして速やかに部屋の外へと出ていった。

長い間雷というついでに雷に甘えたくなくなってしまう。

それだと雷のためにならない。

だから、なるべく雷を見ないでその場を後にした。

これで雷の体調も良くなるといいな。

最近本当に悪いらしかつたし。

「・・・しれいかん、なんで、なんで、なんで、なんで、ナンド、ナンド、ナンド・・・」

司令官はなんで私に一週間も休暇を与えたの？

司令官はなんで私に仕事を与えないの？

司令官はなんで私と目を合わせてくれないの？

司令官はなんで私がいなくても大丈夫なの？

司令官はなんで・・・私がイラナクナツタノ？

4話：病んだ雷

．．．ふう、私は雷に指示されたとおりのことを伝えると、そそくさと自室に戻った。そこには雷を除いた響型．．．あ、いや、響はお姉ちゃんっぽいけど、暁が一番の上だったっけから暁型か。

の三人が待ち構えていた。

「司令官、指示通りにちゃんとやってくれたかい？」

「あ、ああ、ちゃんと一週間の休暇を与えたよ。半ば強引にな」

響の言う通り、雷は休みを故意に受け取ろうとしない。

いつも「司令官は私がないとダメなんだから」といい、取らないのだ。

だから体を休めてもらうために無理にでも休んでももらうためにはこうするしかない。かったらしい。

「まあ、休みさえ取れば後は私たちが何とかするわ。ローテーションで秘書官と雷の付

き合いをしてあげるんだから」

「そ、そうなのです！だから司令官さんはなんも心配はいらないのです」

「そうか、それは頼もしいな」

ま、まあ、暁たちもそう言ってるんだし、大丈夫、なのかな？

・・・私が大丈夫かはわからないが、雷のため、一週間だけでも、な。

「それじゃあ、今日はもう遅いし、間宮の洋館を食べ終わったら早く寝ろよな」

「わー、流石司令官さん、太っ腹なのです」

「これは、興奮する」

「あ、ありがとう、お礼はちゃんとと言えるし」

よしよし、可愛いなあ。

しかし、この娘たちのおかげだな。

私には母親という存在がない。

生まれてすぐに死んでしまったからだ。

それがに雷に甘え過ぎていたようだ。

雷に無理をさせていたというのにな。

）
なんデ、ナノ。

司令官はなんで私に・・・。

その先を考えようとした時、今まで感じたことのない感情が宿った。

それは黒く、理性はそれをいけないと、それ以上は考えてはいけないと訴えていた。

だけど、それに浸かってしまえばとても楽になれるような、そんな感じだった。

・・・い、いや、よく考えるのよ、私。

なんでかっつていう理由を聞いてないじゃない。

それを聞くまではわからないわ。

そうよ、それにこんな感情は・・・。

）

そうと分かれば善は急げ、司令官は今執務室にいるはずだわ。

自分の休みの理由を聞くだけだし、不自然なことはないから大丈夫よね。
ん、あれ、何故か司令官の部屋から話し声がするわ？

なんでかしら。

それにこの声……。

覗いてはいけないと思った。

覗いたら何かが、自分の中の何かが壊れてしまいそうだと思ったからだ。

だけど、覗いてしまった。

そこには、私以外の第六駆逐隊のみんなが間宮の洋館を食べながら司令官と楽しそうに話していた。

それを見た瞬間私はその場から逃げ出してしまった。

そしてその時確実に私の中でドス黒い感情が生まれていた。

くくくく

司令官、なんで、なんでなの？

私はもうイライナイの？

で、でも司令官がそんなことを……。

じゃ、じゃあ、電たちが？

……い、雷たちが、そ、そんなことを……。

くくく

雷に休日を与えてもう五日もたった。

その間の秘書官は他の第六駆逐隊のみんながやってくれた。

というか、雷なしでも艦隊を回すために関しきえていたという方が正解だろう。

何せ休みを与える前二日の仕事は雷に見せる前に数を減らしていたおかげでこの雷

が休みの一週間に上乗せされていたのだ。

それと他の艦娘は雷が秘書艦で無くなったのを不思議そうにしていたが、そのたびに臨時の秘書艦である電、響、暁が説明をした。

そうすると大体の娘はそれ以上何も聞いてこなかった。

ところで今日の秘書艦は暁なのだが、何やら鎮守府内で事故があったらしく、見に行っている。

何でも陸奥の艀装が爆発したとかなんとか。

そんな伝達が来たのだと。

—トントン、トントン

ん、ノック音？

「入っていいぞ。暁か？どうだつて．．．!?」

私は目を疑った。

なぜなら、俯いてはいて顔が見えないものの、入ってきたのは暁でなく、一週間の長期休暇を与え、他の第六駆逐隊の娘たちが内地に出かけていると言っていた筈の雷だったからだ。

おかしい、今日、この時間に、この場所に雷はいないはずなのだが．．．。

「司令官、私がいるじゃない!」

雷が顔を上げてこっちを向いた瞬間私の動きは止まった。

なぜここにいるのかを聞こうとした口は開きつぱなしになってしまっていた。

「司令官、ちよつとだけ眠ってね？」

そう言つて雷は何かを取り出した。

そして、それ以降の記憶はない。

）

「……ん、んは？」

そして、次に意識が戻つた時に初めて見たのは、見たこともない天井だった。

「あ、司令官、起きたのね」

「……いか、づち？」

雷が私の顔を覗き込んだ。

そして、私は気付いた。

私の体がベットに拘束されているという事に。

身動き一つとれないのだ。

「つ、い、雷、これはどういう事だ!!」

思わずそう叫んだ。

つもりだったのだが、今の状況と、そして雷の放っている何とも言えない雰囲気の中で声が震えてしまった。

「司令官、震えちゃって、どうしちゃったの?」

そのおかげで雷はこういう始末だ。

情けないと思うが、状況が状況だから仕方がないだろう。

しかし、ここがどこで、何でこうなっているかがわからないのは問題だ。

「い、雷、こ、ここはどこなんだ?」

「司令官、何も心配いらないわ。司令官の世話はすべて私がやってあげるんだから」

雷は質問に答えなかった。

その代わりに私としてはうれしいが、怖い、そんなセリフを口にした。

「い、雷、説明してくれ、どういう事なんだ?」

「司令官が知りたいなら何でも教えてあげるわ。何でも聞いてちょうだい」

雷は待つていたといわんばかりの反応だった。

これだけだともいい状態なのだが、ある違和感気付いてしまった。

雷の目からハイライトが消え去っていたのだ。

そのため、質問しようとしていた口が閉じてしまった。

「あれ、どうしたの、司令官？」

司令官は何だかわからないけど、小刻みに震えている。

あれ、寒かったかな。

今度来るときはストーブも持ってこないと。

今は毛布ぐらいしかないわね。

「寒かったのね、司令官。ほら、毛布を掛けてあげるわ」

あれ、首を振ってる？

違ったのかしら。

「雷、お前はこういう事をする娘じゃなかったはずだ。なんでこんなことをするんだ！」

司令官は絞る出すような声を出していった。

司令官は何を怖がってるの？

何があっても私がいるから大丈夫じゃない。

それにわたしはこんなことをする娘じゃなかったって？

そうね、そうだったわね。

それじゃあ司令官にはいろいろと説明してあげないといけないわね。

「私が高んてこんなことをするのかつて？そんなの決まってるじゃない。私が司令官のお世話をするためよ。司令官はもう私なしに生きていけないのよ」

「……おまえ、何を……」

ふふ、もう司令官は私だけの司令官。

そして私も司令官だけの雷。

ふふ、ふふふ、これからの司令官との生活を考えただけでゾクゾクするわ。

まずは司令官に私のことを知ってもらって、私も司令官のすべてを知るわ。

「もうこれからは私は司令官のために……司令官ノタメダケ尽クスワ。ネ、司令官モ嬉シイデシヨ？モウコレカラハ司令官ハナアーンニモシナクテイイノヨ？ダツテ……」

次のセリフを言う前に、私はチラリと司令官の様子を窺った。

そしたら司令官はガタガタと震えていた。

震えるほどうれいなんて、司令官もわかつてるじゃない。

「シレイカン、ワタシガイルジャナイ！」

私は満面な笑みで司令官に向けていった。

これからはずーっと、司令官には私だけだと思うと、何でもできそうだなわ。
司令官の為なら、司令官ノ為ナラ、シレイカンノタメナラ・・・

終話（パターン1）：共依存の末に・・・

「シレイカン、ワタシガイルジャナイ！」

そう言った雷から何とも言えない不気味な雰囲気を漂わせていた。

そのそんな雷から発せられた言葉は多分普通は恐怖を感じる類なんだろう。

だけど、私は違った。

いつもなら多分感じ取れなかっただろうが、状況も状況である。

そう言う事に敏感に感じ取ることができたのだろう。

その言葉に少しだが、懇願のようなものを感じ取れた。

というより雷はその意思が核としてそのセリフを口に出したのだろう。

だから、別段私は恐怖を感じなかった。

それどころかその逆、嬉しく感じた。

「司令官、私に頼っていいのヨ？私がない間、大変だったんジャナイ？甘えていいのヨ

？ほら、膝枕してあげるワ」

雷はそういうと正座をした。

だがすぐに私が何も反応を示さないのに気付くとスツツと立ち上がると、

「ゴメンゴメン、そうよネ、拘束されてたらできなかつたわよネ」

そう言い、雷は私の拘束を解いた。

だから逃げようと思えば雷にフエイントをかけ、ドアのところまで行けばいい。

そうすればこの訳の分からない状況から逃げるができるだろう。

・・・だが、私はそう行動しなかつた。

だって、雷を見ているとこの状況でもいいかな、つと、

こんなずっと雷のしてくれることに甘えて、生きていくのもいいんじゃないかって
思った。

だって、今までだってそうだったじゃないか。

それが少し今までよりも、つてだけじゃないか。

私は雷の元へとフラフラとした足取りで歩いて行つた。

そして正座をし、自らの太ももを叩き、先ほど言っていた膝枕を促すしぐさをしてい
た。

そして私はそれに素直に応じた。

そうすると雷はとても嬉しそうに笑っていた。

ちやんと笑っててくれた。

もうその時には私は雷の目に光が宿ってないことなど少しも気にしていなかった。

私がいなくなった鎮守府のことなど少しも頭になかった。

だって、

「司令官、大丈夫ヨ！司令官ハなあーんにも心配シナクテイイノヨ。ダツテ、ワタシガイ
ルジャナイ」

その言葉を聞くと私は理由はないが心が落ち着いた。

もう雷に自分のすべてを任せてしまってもいいと思つた。

・・・そして、私は目を閉じた。

）

司令官は目を閉じると、安心したのか、眠ってしまった。

よかつたわ、こんなに司令官が素直になつてくれるなんて。

もう、もう誰にも邪魔されないようにしないと。

司令官が寝ている間に鎮守府をどうにかしないといけないわね。

このまま私が帰らないと確実に私が犯人じゃない。

そしたら給料ももらえなくなっちゃうわ。

「とりあえずどうしようかしら。・・・そうね、騒ぎが収まるまでしらを切り続けようかしら」

私はそんなことを考えながら司令官のベッドに運び、ちゃんと部屋を暖かくすると、部屋から出ていった。

）

見つかるはずのない秘密の部屋から出て、自室の部屋の扉を開けるとすぐに声が飛んできた。

「あれ、雷、大変なんだ！司令官がいなくなっただんだ！雷、思い当たることはないかい？」
響姉ってば、そんなに取り乱して、思い当たることはないかい？だって、私のところ

にいるのにね。

でも、そんなことは言わないわ。

だつて、そんなこと言つたら、せつかく響姉や暁姉、電たちから隠したのに、また取られちゃうじゃない。

せつかく司令官も素直になつてくれたのに。

「あら、そうなの？司令官つてばどこに行つちやつたのかしらねえ？」

ふふ、でも予想通りだわ。

ほとんど会えない五日間は死ぬ思いだったけど、その間に司令官を閉じ込める絶好の場所と、道具を仕入れることができたし、第一休み中なら疑われることはないものね。

ふふ、司令官の為ならどんなことだつて思い付くし、やつてやるわ。

「ご、ごめんなさい。私が目を離したばかりに……。一番のお姉ちゃんなのに……ひつく」

「な、泣いちゃダメなのです。暁姉のせいではないのです。暁姉は報告が本当かを調べに行つただけなのです。だから暁姉のせいではないのです」

「で、でもお。その報告、嘘っぱちだし……ひつく。私が騙されなければあ……ひつく。司令官がいなくなることはなかったのお……」

……流石に疑われないためだからつて他の艦娘が秘書艦の時に司令官を攫うのは骨

が折れたわ。

まあ、どんなことでもしてみせるのだけど。

そうそう、後で司令官当てに届いた出張書でも自作しないと。

そして司令官から指示書という事で雷に意向を知らせるため、言うとおりにするよう
につて書いておかないと・・・。

大丈夫よ、司令官、この艦隊は司令官の代わりに雷がちゃんと回してあげるんだから。

「・・・雷、ほんとうに、ほんとうに知らないのかい？」

「ん、何よ？私を疑ってるの？」

私はその時鎮守府にいないことになってるのに何を疑ってるのかしら？

そういえば響姉は勘がよかったわね。

それにこの目、なんだかいやな予感がするわね。

・・・解体任務はこれで一隻決まりね。

ふふ、司令官と私とを邪魔するならナンデモスルワヨ。

）

「司令官、お夕飯の時間よ、起きて〜」

司令官に馬乗りになり、揺さぶると、司令官は目をこすりながら起きた。フフ、モウ、司令官タラ、カワイインダカラ。

この瞬間がずっと続けばいいのニ・・・。

まあ、そんな心配、もうしなくてもいいのだけどね。

だって、司令官の居場所で私を疑う娘はもうイナイもの。

だから、私と司令官を邪魔するモノはもういないんだから。

そしてこれからの司令官とのことを考えるとつい笑みがこぼれてしまう。

そんな気持ちを抑えることはできない。

つい、あふれ出てしまう。

だから、寝起きの司令官に抑えられない笑みでこう言った。

「シレイカン、コレカラモ、ズット、ズウーット、ワタシガツイテルンダカラ！」

終話（2）：意志疎通

（

「シレイカン、ワタシガイルジャナイ！」

「っ……」

その今までに見たことのない雷がそこにいた。

提督業をされていてずっと雷とともにいた。

だから雷のことは知り尽くしていると思った。

だが、そうじゃなかった。

暁型の雷たちの姉妹に雷のことを考えろといわれたからだ。

そして、その後でちゃんと雷のことを知れたと思った。

そう思ったのは間違っていたことにこの瞬間気付いた。

だから、私はこの言葉を口にした。

「すまなかった、雷」

「……？」

案の定雷は不思議そうな表情をした。

何を言われているのか、私が何を言っているのか理解しがたいといった感じだ。

だから私は続けた。

「雷、私が悪かった。許してくれ」

「……ナンデ、シレイカンハアヤマツテルノ？」

雷は何を思ってたか、その顔には焦りが見え、ベッドに拘束された私に馬乗りになると、肩をゆすり始めた。

それはあまりいい状態ではない。

だから、精一杯の声を出した。

元の雷に戻ってくれることを願って。

「私は今の雷が、嫌い、だ！」

「!？」

言ってしまった。

多分この言葉は雷に深く刺さっただろう。

傷ついただけだろう。

でも、私はこんな雷を好きになつたわけじゃない。

「・・・シレイ、カン？」

次の瞬間、私の頬に何かが落ちた。

それは重力に沿って滑り落ちた。

そしてそれは次々と落ちてきた。

私はそれを見ることなく、それが何なのかはわかった。

「や、やっぱり、司令官は、私のことが・・・」

私が叫んだその言葉を聞き、雷は涙を流していた。

その目は涙のおかげか、光は戻っていた。

だが、これでいいわけではない。

私は自分の行動を止めることができなかった。

止めたくとも、涙は次々とこぼれていく。

大粒の涙はたった今まで好きだった男性の顔へと落ちていつていた。

私は驚いていた。

だって、もう何を言われても平気だと思ってた。

なにを言われても揺るがないと思っていた。

でも、違った。

大好きだった人の声は私のさつきまでの状態、何でもできるといふ自分が自分でない状態が壊れ、絶望を与えた。

それは、私からすべてを消す言葉だった。

私の心にはぽっかりと穴が開いた。

この涙が枯れた時、私は生きていけるかもわからなかった。

そして、私は吐き出すように言った。

「私のことが、嫌い、だったのね……」

「嫌いなわけないだろ！」

「え!？」

私は耳を疑った。

だって、ついさつき私に……

私は混乱した。

その言葉はさつきと同じくらいの力を持っていた。

けれど、その言葉はさつきの言葉のせいで素直に受け入れていいのかがわからなかった。

「私は、今の、いつも通りの雷が大好きだ！」

「っ／＼／＼」

私は司令官の言ったセリフでさっきの言葉たちを理解した。

司令官は私のことを元から好きでいてくれた。

司令官はその好きな私を元に戻すためにあのセリフを……。

ま、まあ、確かに戻ったけど、流石にひどいじゃない。

……ま、まあ、結果的には、う、嬉しいけど／／

「い、雷？いつもの雷か？」

司令官は私が元に戻ったのかを疑っている感じに言った。

もう、戻ってなかったらさっきのセリフ、おかしいことになっちゃうわよ。

で、でも、あれって、告白、じゃない。

私はそんなことが頭を駆け廻った。

だけど、司令官の心配そうな顔をしている事に気付くと、一旦それらを考えることをやめた。

そして私は、今度は嬉し涙を流しながら、司令官に向かって、いつも通りの満面な笑みを見せ、言った。

「あつたりまえじゃない！」

私は雷に拘束を解いてもらうと、部屋から出て行つた。

するとそこは鎮守府近くの古びた倉庫の奥の床であつた。

こんなところに通路があるとは……。

まあ確かに深海棲艦にもし襲われた時には便利そうだな。

「こんなところにある隠し部屋、私も知らなかつたよ。すごいな、雷」

私はそう言うと雷は複雑そうな顔をした。

しかし、私が頭をなでてやると素直に喜んだようで成されるがままになっていた。

……こういう雷の顔も好きだなあ。

「それじゃあ帰るか。……仕事、溜まつてるしな」

「私を頼つてもいいのよっ。」

雷は目を輝かせて私を見上げた。

ほどほどにしないと。

そんなことを話しながら歩いてみると、鎮守府にたどり着くとすぐに一人の艦娘が現

れた。

「・・・司令官、どこに行つてたんだい？それに雷は町に行つてたんじやないのかい？そんな二人が一緒に帰つてくるとは」

「ぐっ」

流石響、鋭い。

「・・・盛んだつたんだね。でもほどほどにしないと憲兵に捕まつてしまうよ？」

「いや、なんでだよ!!」

ちよ、それはほんとシヤレにならないから。

ていうかそこ、雷、それもいい、的顔をするな、本当に捕まるからね!?

「・・・はあ、まあそれはいいから。それより仕事をしないと。それと今日から秘書艦は雷に戻す。いいよな、雷？」

「あつたりまえじゃない」

私と雷はそう言うのと執務室に向かった。

響は何かをみんなに伝えるとか言つて、別の場所へと走つていった。

・・・まあ、大丈夫だろ。

「・・・雷、ちよつといいいか？」

「ん、何、司令官？」

私はつい雷を呼び止めてしまった。

言おうとしていたことはあつたが、言うのは少しためられたのだ。

だが、雷は私の言葉を待っていた。

「雷、私がつとつかりしたら、雷がつと大きくなつたら、指輪、もらつてくれるか？」

「……／＼／＼　いいいわよ、司令官！」

言うのは恥ずかしかつたが、それ以上に雷が照れているのを見てほおが緩んでしまつた。

そしてこの瞬間私は、目の前で照れながら笑いかけてくる一人の艦娘を、雷を一生大切にしようと心に誓つたのであつた。

あ、憲兵さん、お呼びじゃないですよ!?

）

号外「提督と雷、密会を!?!」

「・・・おい、青葉、これはどういう事だ？」

「ああ、それですか？ある人からの情報提供で書くことができましたよ？」